

平成28年10月22日に開催された長久手市社会福祉大会において、小・中学生を対象に行った「児童生徒福祉作文コンクール」の入賞作品と、小・中学生の福祉体験の作文発表が行われました。

市長が、その発表を聞いた感想を政策秘書課職員と話した内容です。

子ども達の作文発表を聞いて、うれしくなりました。ほんの一部を紹介します。

- 人は一人では生きられません。そして、介護も一人ではできません。みんなで助け合うこと、それが何よりも大切です。身近に介護を必要とする人がいなくても、できることが必ず何かあるはず。私はまず登下校時にあいさつをすることから始めようと思います。(長久手中女子生徒)



- 老人ホームに慰問に行って、お年寄りと一緒に歌を歌ったり、クイズをしたりしました。一人のおじいさんが、「来てくれてありがとう。」と涙を流してくれました。私は驚いて、その訳を聞くと、おじいさんは「家族と離れて、知らない人の中で暮らして寂しい。」と話してくれました。私は、ただ聞いていただけだったけど、そのおじいさんは、最後に「聞いてくれてありがとう。すっきりしたよ。」と笑ってくれました。

話を聞くだけでも、誰かを楽な気持ちにすることができるのだと不思議な気持ちになりました。「聞く」ということも福祉なんだと思いました。(南小学校男児)

- 私は、おじいちゃん、おばあちゃんと暮らしたことがないので、老人ホームに行ったとき、どうしたらいいのか分かりませんでした。一人のおばあさんから、「名前は?」「どこに住んでるの?」「何小学校?」と30分くらいの間に、何度も同じ質問をされました。そのとき、以前に受けた認知症サポーター講習で、認知症の人は、少し前のことが思い出せないと聞いたのを思い出しました。私にとっては同じ質問でも、このおばあさんにとっては、初めての質問で、私に関心を持ってくれているんだと思い、何度も丁寧に答えました。(東小学校女児)

いずれの発表も、子ども達が素直に感じたことを、子どもらしい言葉で綴られていて、私たち大人の心に響きました。

子ども達は、車椅子体験をしたり、認知症サポーター養成講座を受講したり、老人ホームにボランティアに行ったりと、自分が実際に経験したことで、周りの人の

ために、自分ができることをやることが「福祉」なんだと気づき、自分ができることは何があるだろうと、いろいろ考えてくれたようです。

※掲載した文章は、作文や発表の一部を抜粋して掲載しています。

児童生徒福祉作文コンクール優秀作品集は、市社会福祉協議会（福祉の家内）で配布しています（数に限りがあります）。

～市長の話聞いて～

今回、社会福祉大会に参加された方達から、子ども達の作文が非常に良かったという感想を聞きました。私は当日、会場に伺えなかったので、後日、福祉作文コンクール入賞作品集を読ませていただきました。

その中にあった、「福祉は ㊦だんの㊧らしの ㊨あわせづくり」という言葉が印象に残りました。今、子ども達が感じている「福祉」の考え方を、大人になっても持ち続けられるよう、私たち大人こそが変わるべきだと感じました。